

## 論文審査の結果の要旨

平成 31 年 2 月 19 日

申請者： 田中 都

論文題目： グロリア・ネイラーにおける環境意識の軌跡  
—エコクリティシズム及びエコフェミニズムの観点から—

田中都氏の論文「グロリア・ネイラーにおける環境意識の軌跡—エコクリティシズム及びエコフェミニズムの観点から—」は米国黒人女性作家グロリア・ネイラーの初期 3 作品である『ブリュースター・プレイスの女たち』、『リンデン・ヒルズ』、『ママ・デイ』を採りあげ、特に『ママ・デイ』に焦点を当ててエコクリティシズム及びエコフェミニズムの観点から論じたものである。欧米ではトニ・モリスンやアリス・ウォーカーと並んで論じられることもあるネイラーであるが、日本ではこれまでほとんど注目されて来なかった。本論文がネイラーの諸作品を丹念に読み込み、先行研究の数々を紹介し応用していることには大きな意義が認められる。さらに従来はフェミニズムやポストコロニアリズムの理論をベースに読まれ分析されることの多かったネイラー作品を環境の視点から読み解き、彼女の環境意識の在り方を探求している点にオリジナリティーの一端が伺える。審査員からは「先行研究を綿密に参照し、地形、場所の記憶、環境正義の観点から考察し、作家と作品に新たな照明を与えた力作」との評価も得ている。「場所の感覚」というエコクリティシズムの概念と 3 作品の舞台として付与された独特な地形との関係からネイラー作品を読解することにより、従来のネイラー研究を一步進めるに至ったと考えられる。

惜しむべき点としては、各章の構成および各章内部における論理的展開は整っているものの、全体としての有機的つながりがやや弱く、エコクリティシズムに対する執筆者自身の姿勢と思想的な方向性が明確には示されていないことが挙げられる。エコクリティシズムの歴史的な変遷と現在の展開についての理解を深め、自らの考え方をその中に位置づけていくことが田中氏にとって今後の課題となるであろう。

口述審査は、平成 31 年 2 月 15 日(金)13 時 30 分より、城西国際大学東金キャンパス本部棟 4 階会議室で実施した。冒頭で田中氏による丁寧な概要説明があり、引き続いて行われた質疑応答では、スミス、北田、芳賀、小林の順に 4 名の審査委員から率直な意見と質問が田中氏に投げかけられた。論文の普遍性が問われた際には田中氏が言葉に詰まる場面もあったものの、ネイラー作品における嗅覚の表現や場所の感覚についての質問に対しては、審査委員にとって概ね納得のいく回答が得られた。また参考文献と本文の記述について審査員から一部修正・加筆が求められ、それが短期間で修正可能な範囲であると認められたため、全体として合格という判断に至った。

主査：	人文科学研究科	芳賀 浩一
副査：	人文科学研究科	小林 富久子
副査：	人文科学研究科	北田 幸恵
副査：	人文科学研究科	Jordan Smith